

Kiri PARAMORE

Premodern Secularism

前近代の世俗主義

世俗主義は、必ずしも近代に固有のものではなく、前近代、近代を問わず、いろいろな時期に繰り返し現れてくるものである。本論では、ひとつの事例研究として、1200 年に及ぶ日本史を大きな流れとして捉え、その中で世俗主義が現れてくる歴史的サイクルを提示し、次に、中世後期から近世への移行期のひとつの重要なサイクルにおいて起こった宗教と政治の関係の変化を重点的に論じた。この時期に政治と宗教の新しい関係が生まれ、日本の政治における宗教的要素として、朱子学が仏教に代わって登場してくる。この朱子学によって支えられた近世の政治と宗教の相互作用の体制は、非常に安定したもので、公的なディスコースを支える機能を果たしていたというのが本論の主張である。結論として、東アジアが近代化していく中で、この近世の政治・宗教関係が破壊されてしまい、それが、現代の中国と日本が、政治と宗教の安定した関係を欠いたままである原因になっているのではないかと論じた。

【儒教、朱子学、仏教、公共圏、政治的宗教、近世史、近世期】

Mark TEEUWEN

Clashing Models: Ritual Unity vs Religious Diversity

衝突する概念モデル——儀礼的統一 vs 宗教的多様性

19 世紀と 20 世紀の日本における宗教的／世俗的領域の境界線に関する議論においては、次の 2 点に注意する必要がある。ひとつは、明治以前の日本社会の「信仰」のあり方と明治以降の「宗教」のあり方の不連続性を強調しすぎる議論には用心深くあるべきだということである。ディスコースの連続性を認識してこそ、新しい概念モデルが、それまでの価値観と世界観の中でどのように扱われながら確立してきたかを理解できるであろう。もうひとつは、宗教界の制度的現実が、新しい宗教政策の実施を 挫折<sup>さつせつ</sup>させてきたということである。つまり、宗教と世俗との間の線引きを新たに設計しようとしても、日本社会において寺社が伝統的に機能してきた現実が重い 枷<sup>かせ</sup> となって、思うように事が運ばず、さまざまな矛盾が生じて、それが境界を定めるプロセスに影響を及ぼしたと考えられる。

【檀家制度、祭政一致、孝行、水戸学、国家神道、祭祀法人、世俗信仰としての神道、宗教概念】

Hans Martin KRÄMER

**Reconceiving the Secular in Early Meiji Japan: Shimaji Mokurai, Buddhism, Shinto, and the Nation**

明治初期の《世俗性》の再考——島地黙雷、仏教、神道、国家

明治初期、日本の仏教徒はいくつもの深甚な変化と折り合いをつけなければならなかった。仏教界の上層部にとっての一番の難題は、明治政府が、近代国民国家としての日本における宗教のありかたを模索する中で、急進的な新しい宗教政策を取り、もはや仏教に、近世の檀家制度のような庇護<sup>ひご</sup>を与えず、神道を優遇するようになったことである。制度面での試練は、1872 年から大教院によって始められた大教宣布運動で、宗教的指導を続けたい者は、この運動に参加しなければならず、同時に仏教徒は、この運動の傘下で指導している間は、自分の宗派への勧誘活動をすることを禁じられた。

しかし浄土真宗の僧侶たちは、この難局を切り抜けるために積極的に動き、とりわけ本願寺派の島地黙雷は目立つ存在であった。黙雷は、1872 年の仏教徒たちの欧州視察団に加わり、それによってフランス、イギリス、ドイツで吸収した新知識と、伝統的な仏教の学識とを統合した。そして近代以前の用語例を参照しながら、政治の領域と宗教の領域の分離を初めて概念化し、さらに続けて「宗教的な教育と世俗的な教育」を別する考えを打ち出した。この分離によって「宗教」という概念が初めて日本に生まれたのである。

明治初期の政府の宗教政策によって押しつけられた制約から仏教を解放するために、「宗教」の領域を分離するという黙雷の知的活動は、タラル・アサドが描く世俗主義の政治的イデオロギーと構造的に似通ったものがある。世俗主義を純粹に西洋的なものとするアサドの考えは明らかに誤っている。黙雷の事蹟は、日本が近代に移行する際に出てくるさまざまな政治問題に対して、思想と政治の領域における指導者たちが、日本の伝統と西洋から移入した新知識を統合しながら、いかにして日本人自身の解決法を編み出していったかの一例証となっている。

【世俗化、世俗主義、近代性、近代化、タラル・アサド、ホセ・カサノヴァ、チャールズ・テイラー、浄土真宗、宗教概念、宗教政策】

James Mark SHIELDS

Immanent Frames: Meiji New Buddhism, Pantheism, and the “Religious Secular”

内在的枠組み——明治の新仏教、汎神論、「世俗信仰」

「近代」が宗教の破壊を、少なくとも容赦のない個人化をもたらしたという、いわゆる世俗化理論は、西洋の 18 世紀以降の歴史的展開についての、明らかに一般性を欠いた、しばしば過度に単純化された解釈に基づいている。本論では、明治期（1868～1912）の新仏教同志会の事例を取り上げ、日本の近代という文脈の中での《世俗》という概念範疇を問い直してみた。新仏教同志会は、原始仏教や東アジアの仏教の要素と西洋近代思想を織り交ぜて 社会性 と 現世性 を強く打ち出した仏教を推進し、宗教と世俗の概念的境界、実際的な境界を取り崩そうと、ないしは、境界線が引かれるのを防止しようとした。すなわち彼らは、チャールズ・テイラーの言う「内在的枠組み」の中にしっかりと根づいた生ける仏教を求め、急進的世俗主義の「卑しい物質主義」を拒んだのである。

【新仏教同志会、世俗性、「社会参画仏教」、進歩主義、内在性】

Kate Wildman NAKAI

Between Secularity, Shrines, and Protestantism: Catholic Higher Education in Prewar Japan

世俗性、神社、プロテスタンティズムに囲まれた隘地で  
——戦前の日本におけるカトリックの高等教育

宗教と教育の関係に対する戦前の日本政府の施策は、キリスト教系の学校に、相互に交差する 2 つの異なる難題を突きつけた。ひとつは、文部省訓令第 12 号（1899 年）の、国が認可した学校は、公立、私立を問わず、宗教教育や宗教的儀式を行ってはならないという声明に見られるような、アフメット・T・クルが「積極的世俗主義」と呼ぶものに幾分似た政策である。しかし政府はその一方で、1910 年代以降次第に、学校生徒や学生の神社への参拝と、そしてそれに準ずるものとして、校庭で天皇および国家に対する尊崇を示す儀式の遂行を訓令した。キリスト教やその他の宗教団体からの反対に対して政府は、そうした行為は「宗教的」行為には当たらないと拒絶したが、宗教団体側は、「消極的世俗主義」とでも言うべき陣を張って、その種の活動に参加することに抵抗した。

上智大学（ソフィア・ユニバーシティ）の戦前の歴史にも、同様のひとつの展開の跡が刻まれている。イエズス会によって 1913 年に創立された上智大学は、プロテスタント系の大学よりも後発であったために、開学者たちは創立当初から国家の断固たる世俗主義的教育政策に適合していく道を選んだ。神社参拝と国家的儀式に関して、イエズス会士たちは最初ずっと非順応的であったのだが、1932 年の上智大生靖国神社参拝拒否事件の後、上智の執行部は、政府の推進する行事に対する消極的な世俗的抵抗から離脱し、そうした行事は愛国心の「市民的」表現であり、カトリックの信仰・実践と矛盾するものではないとして、政府の方針を受け入れるようになっていった。

【上智大学（ソフィア・ユニバーシティ）、イエズス会、訓令第 12 号（1899 年）私立学校令（1899 年）、専門学校令（1903 年）、大学令（1918 年）、教育勅語、上智大生靖国神社参拝拒否事件（1932 年）、御真影、国民精神総動員運動】

Erica BAFFELLI

Contested Positioning: “New Religions” and Secular Spheres

論争を呼ぶスタンス——「新宗教」と世俗的な領域

日本の新宗教は、主流の社会体制とは別の可能性を求めて、政治、教育、福祉といった広範な世俗的領域に進出しようとしてきた。本論は、新宗教が政治・教育活動において、何を重要視したかを論じたもので、特に教育分野におけるいくつかの新宗教の活動と、自分たちの教義とイデオロギーが反映されるようにするには教育体制をどう変えるべきかについての彼らの考えに力点を置いて考察した。最初にこのテーマについての一般論を述べた後で、1980年代に設立された新宗教、幸福の科学をケース・スタディとして取り上げた。幸福の科学は2014年に大学の新設を申請し、文部科学省はそれを却下したのだが、それに対する幸福の科学側の反応を見れば、教団が学問をどのように捉えているか、社会における教育の役割についてどういうヴィジョンを持っているかを窺うことができる。

【教育、高等教育、ハッピー・サイエンス・ユニバーシティ、幸福の科学、文部科学省、世俗化、新宗教】

Isaac GAGNÉ

Religious Globalization and Reflexive Secularization in a Japanese New Religion

日本の新宗教における宗教的グローバリズムと再帰的世俗主義

本論は、日本の新宗教運動に関する民族誌学的研究に基づいて、グローバリゼーションのプロセスと、現代日本における宗教／世俗性の形成プロセスの相互関係を考察したものである。現代日本における新宗教の発達をたどり、グローバルな展開を目指すひとつの新宗教をケース・スタディとして考察することにより、指導者たちが、自分たちの組織構造とイメージをどのように変えようとしているか、信徒たちがそうした変化にどう反応するか、またこうした変化が、宗教的グローバリズムと世俗化の力学にどのような関係を持つのかを分析する。近年の世俗性に関する比較的アプローチに沿って、宗教的グローバリズムが、グローバルな成長と、それに必然的に伴う意識的な組織構造の改編——そのどちらもが、宗教と世俗性についてのグローバルな見方、ローカルな見方の双方から考えを摂取している——を胚胎している可能性を明らかにする。最後に本論は、現代日本の「世俗性の形成」が、グローバリゼーションのプロセスと密接に関わっていることを提起した。グローバリゼーションのプロセスとは、日本社会で広範囲にわたって起こっている諸変化に呼応するものであり、宗教と世俗性の、ローカルなレベルとグローバルなレベルの両方における、選択的ではあるがダイナミックな相互作用を通じて屈折させられているのである。

【グローバリゼーション、内的世俗化、日本の宗教、新宗教運動、宗教的権威、世俗化理論、新宗教】

Aike P. ROTS

Public Shrine Forests? Shinto, Immanence, and Discursive Secularization

鎮守の森の公共性——神社、内在性、言説的世俗化

本論は、現代の神道思想を、「世俗」「世俗化」という概念範疇形成をめぐる近年の理論に照らし合わせながら分析したものである。チャールズ・テイラーの概念範疇——「宗教」「世俗」——の原義、および黒田俊雄等の著作に基づいて、より超俗的で禁欲的な仏教に比べると、前近代の神道は、「内在性」と「世俗性」の強い信仰であった。明治時代には、仏教、キリスト教、「新宗教」が、私的で選択的な本質を有する「宗教」として位置づけられたのに対し、神道は、近代日本の「内在的枠組み」（ないしジョセフソンの言う「世俗信仰としての神道」）であり、民間的で、集会的で、選択肢のない参照枠であったと考えられる。田中恆清や藺田稔といった現代の神道界の思想家たちは、明治期の神道の理解——日本の文化と社会を形づくり条件づける、内在的、基盤的枠組み——に基づいて、神道の本質を、清浄な共有空間である「鎮守の森」を核に共同体を結びつける公共の伝統として捉え、神道は、他の諸宗教と同じ法的制限の下に置かれるべきではないと考えている。彼らは、神道のディスコースの世俗化を積極的に働きかけ、神道を「宗教」から切り離し、日本の底流を成す「伝統文化」の枠組みの中に納めようとしている。つまり彼らは、戦後の法制や政教分離政策に直接抗うことはしないで、神道を、日本国民全体に共通の善をもたらすような世俗信仰の伝統として、社会的機制の内側に再定位しようとしているのである。

【鎮守の森、「内在的枠組み」、公共空間、神聖化、世俗主義、神道の環境保護的パラダイム、「世俗信仰としての神道」、神社の共同体、藺田稔、田中恆清】



Thierry GUTHMANN

Nationalist Circles in Japan Today: The Impossibility of Secularization

現代日本における国粋主義グループ——世俗化の不可能性

日本は例外であるという時折みられる言説に反し、現代の日本社会も、社会の近代化に伴い個人の世俗化が進行するという定式の例外ではない。しかし同時に、1990年代末から日本の政治の領域では、宗教的要素が復活しつつあって、それは国粋主義グループにおいて特に顕著である。戦前の帝国日本の権力者たちによって国民に押しつけられた国家神道が、こうしたグループのイデオロギー的基盤になっている。そのイデオロギーのふたつの主要な構成要素が、天皇崇拝と靖国神社の戦没者崇拝である。しかし、こうした日本の国粋主義グループのイデオロギーと活動が、今後世俗的な性格を強めるようになる可能性は低いと考えられる。理由は、彼らの日本国民に対するヴィジョンは、基本的に宗教的な性格を帯びているからである。このナショナリスティックな復興勢力の中心的な位置を占めているのが、日本会議という大きな政治的・宗教的連盟であり、日本では多くの有力政治家がこの組織に関わりを持っている。日本会議の会員の思想的立場は、歴史上の国家神道に近い宗教的ナショナリズムから、もっと穏やかな信条に至るまで幅が広い。しかし、これら国粋主義的運動の会員や支持者たちは、程度の差こそあれ、日本民族の黄金時代に対するノスタルジアに動かされているという点では共通していることを指摘した。

【宗教、政治、日本会議、国家神道、天皇、靖国神社、神社本庁、安倍晋三、市民宗教、黄金時代】

Ernils LARSSON

Jinja Honchō and the Politics of Constitutional Reform in Japan

神社本庁と憲法改正を目指す政治

2016 年 1 月初め以来、神社本庁は、日本会議の唱導する憲法改正に対する国民の支持を取りつけるキャンペーンに参加した。本論は、戦後の政教分離に関連する最高裁の判例を分析しながら、この神社本庁の憲法改正運動への関与を理解しようとする試みである。このキャンペーン期間のほとんどにおいて、憲法第 20 条と第 89 条の改正が主たる問題になったことは一度もなかった。それは、神道は宗教とは《別のもの》であるというパラダイムが、最高裁においてすでに優勢になっていたからである。しかし最高裁による、1997 年の愛媛県玉串料訴訟の違憲判決と、それに続く 2010 年の砂川政教分離訴訟における、愛媛県玉串料訴訟の判決の有効性を認めた上での違憲判決に見られる、それまでのパラダイムからの離反を受けて、国家と神道勢力との密接な関係を求める者たちは、新しい道筋を考えなければならなくなった。日本最大の保守系圧力団体の 1 つである日本会議の興隆が、最高裁のこの方向転換と時期を同じくしているのは、その視点から見れば理解しやすくなる。もし日本会議が、彼らのヴィジョンを盛り込んだ憲法草案を作成するようなことになれば、神道はその他諸々の宗教とは異なる次元のものであるという考えが反映されるであろうと思われる。

【神道、日本の最高裁判所、日本会議、神社本庁、日本の世俗主義、自由民主党、憲法改正】